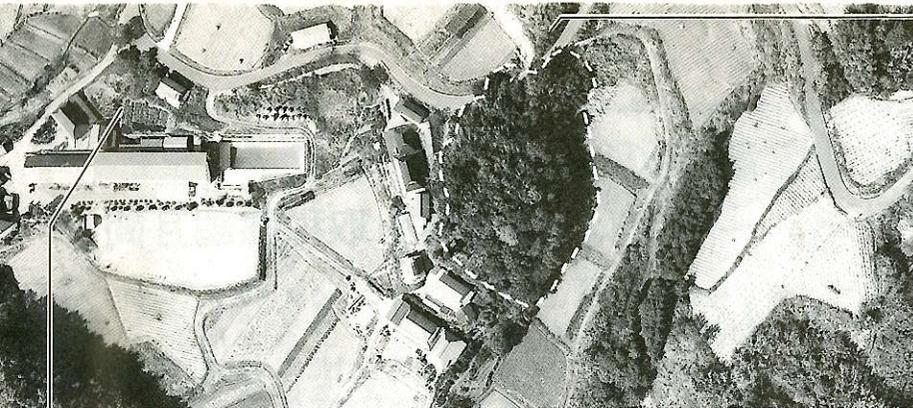


三和町山城誌

(一)

前号まで、中世郷土の豪族馬屋原氏について述べた。必然的に、この馬屋原一族の住した城跡にも触れたが、しかしそれはただ城



▲丸山城跡付近の航空写真

時安社会教育施設

跡名とその所在地についてであって、あくまで馬屋原氏の「人」を中心に述べたものであった。したがって「城」そのものについてはほとんど触れるところなかった。

また、町内には馬屋原氏以外の諸氏の拠った城跡も多いので、今回から町内の山城の一つ一つについて、「城跡」と「人」の両面からみてみようと思う。

「丸山城」

三和町大字時安、時安谷城郭の遺構は、狭い谷に突き出た丘陵の先端部分を削平して築いたもので、約一〇aの郭を中心に、近くに馬場や馬を洗ったという堀の跡もあり、居館的要素の強い城跡である。

この城は渡辺筑後守豊綱の居城といわれる。

豊綱は、丹波の大江山の鬼（酒呑童子）退治で有名な源頼光の四天王の一人、渡辺綱の十一代の後裔渡辺友綱の二男といわれ、父子

共に尊氏に従って功あり、沼隈郡に山田を賜り、嫡男は応永五年（一三九八）葦江に赤柴山城を築いて居住。二男豊綱もその頃時安にこの丸山城を築いてこれに住し、初め西時安二〇〇石を領したが後五〇〇石となり、ついに三、〇〇〇石を領し丸山長者と言われた。

子孫相統して天文の頃（一五三二～一五五三）に至り尼子に属して雲州へ移ったという。『西備名正』また一説には吉岡氏に攻められて落城したともいう。『神石郡誌』

「大歳山城」

三和町大字時安、久留美時安久留美谷の東山官林の頂上に一〇〇m×四〇mぐらいと、五〇m×二〇mぐらいの二段の郭がある。

この城は、金山与四郎清高の居城といわれる。清高は久留美二〇〇石を領し、大歳長者と言われた。尼子の旗下で雲州に移った渡辺

「城山」

三和町大字時安、時安谷時安時安谷、丸山城（前記）の南南西約二〇〇mの所にある独立丘陵の領土を削平した約二〇aの郭があり、現在は畑として耕作されている。

この城址は、寛正の頃（一四六〇～一四六六）この地に勢力のあった郷土志良賀佐助の居城跡と伝えられている。

志良賀氏は白髪部の長である。白髪部は、第二十二代清寧天皇（白髪武広国押稚日本根子尊）（しらがたけひろくにおしわかやまとねこのみこと）に嗣子がなかったため、その名を後世に遺すため各国に遣わされ

た御子代部である。のち第四十九代光仁天皇の御諱が白壁部であったから白髪部を真髪部と改められた。

時安の白髪部（志良賀）は置かれたものか他から移住したものかわからない。

この志良賀氏は、郷土吉岡氏と数年領地を争い、遂に寛正四年（一四六三）吉岡氏に亡ぼされたという。

「登武丸城」

三和町大字時安、久留美久留美シン水の窪の奥にあり、吉岡氏がこの地に入った時、拠点としたところと言われている。

（以下次回）

（参考文献『神石郡誌』郡誌続編『西備名区』日本城郭全集12『人物往来社』）

本稿を草するにあたり西郡氏、西屋壽郎氏から助言と資料の提供を受けた。ここに附記してお礼申しあげる。

（文化財保護委員

松井正夫）

三和町山城誌

二、亀石地区の山城

「大壺山城」(大寄山城)

亀石字大壺にあり、比高約四〇mの丘陵の頂上を三段に削平して築かれた山城である。本丸と思われる頂上の郭は、面積約一、八〇〇アールのかなり広大なもので、居館的性格の強い城であったと思われる。

城の歴史は詳らかでないが、鎌倉殿より神石・甲奴両郡(「神石郡誌」には神石・甲奴・惠蘇三郡とある)の郡司に補せられた岡田但馬守員正入道(知行四千石)、同孫八郎の居城といわれる。

元弘の乱(一一三二)に、宮下野入道兼信が五千余騎で攻め寄せ落城し、岡田氏亡ぶ。この時、宮軍大勢にて押し寄せたので、これより大寄山城と呼ぶようになったという。

このあとこの城へは内藤

清実が入り、また宮氏一族が居たこともあるというが名はわからない。

「神石郡誌」には、右大壺山城とは別に独立した大寄山城があったように記されている。

「大寄山城」

一名亀石城、頂部に二段の郭あり、内藤実豊の居城といわれる。「固屋城跡の発掘調査」に記されている。

「神石郡誌」によると、内藤河内守実豊、同刑部左衛門清実、福場備前守成利、同興三郎盛勝の居城という。

正慶年中(一一三二)三(三)実豊ここに築城。後、豊松に移り、元弘年中芸州沼田で討死、弟清実がこの城を守っていたが、桜山没落の時これに従い討死したという。さらに「郡誌」に

いう。この城に在城した城主ら諸氏の名は、悉く甲奴郡亀谷村の城主の名と同一である。この城から亀谷へ移ったのか、亀谷からこの城へ来たものか、あるいは亀石と亀谷が似ているので

誤って双方へ記入したものが明らかでない」と

福場成利は天文年中(一五三二)五三に居り、盛勝は防州に移った。

また、この城の内藤兄弟は「西備名区」では大谷山城に在城と記されて居り、この城には岡田但馬守員正入道、同孫八郎がおり、元弘の乱に宮下野守兼信入道に亡ぼされた。天文年中に福場備前守がこの処を領し、大内に従い、または尼子に従い、のちには毛利に属し、盛勝は毛利移封に従って防長に移り、子孫長府に仕うと記されている。

「大谷山城」(大谷城)

「西備名区」には、内藤河内守実豊の築城、のち実豊は豊松に移り、弟清実がこの城を守り、元弘の乱に桜山軍没落の時討死。

その後山内大和守直重、同亀若丸居城、また、森原石見、佐田彦四郎も在城、その後川上李之亮政秀が大矢城より尼子に従ってここに移り後、大内に従って芸

亀石三城の出典別城主一覧

西備名区	神石郡誌	大壺山城	大寄山城	大谷山城
桜山朝臣詳伝 亀石城(後に大寄山城) 岡田孫八郎員盛 内藤清実(岡田氏没後)	岡田但馬守員正入道 同孫八郎 内藤河内守実豊 同刑部左衛門清実 福場備前守成利 同興三郎盛勝	岡田但馬守員正入道 同孫八郎 福場備前守成利 同興三郎盛勝	大内大和守直重 同亀若丸 同直景 川上李之助政秀	内藤河内守実豊 同刑部左衛門清実 山内大和守直重 同亀若丸 森原石見 佐田彦四郎 川上李之亮政秀

附・大谷山城の大内大和守と山内大和守は同一人物と思われるが、いずれが正しいのかわからない。

州にて討死したとある。

「神石郡誌」の記述には右の中の内藤兄弟と、森原石見、佐田彦四郎の記述がない。直里三千石、李之亮政秀四千石を知行したとある。亀石の三城については、「神石郡誌」「西備名区」「桜山朝臣詳伝」の三つの資料の記述が異なっており、非常に理解しにくい。そこで別表のようにまとめてみた。少しは理解し易いかと思う。

以上のことから考えてみ

るに、亀石には本来二城しかなかった。大壺山城、亀石城は同じ城でそれを宮下野守が大勢で押し寄せてから大寄山城と呼ばれるようになったので、この三城は同一のもので、大谷山城と二城だったと思われる。(以下次回)

参考文献「神石郡誌」「西備名区」「桜山朝臣詳伝」「固屋城跡の発掘調査」

(文化財保護委員

松井正夫)

三和町山城誌 (三)

「大矢城」(三和町大矢)

三和町大字大矢の西部、小田川と相谷川の合流点にあり、海拔五七〇mの急峻な岩山の頂部を削平して築かれたもので、頂上の第一郭(本丸跡)、北側の第二郭(二の丸跡)ともに約一〇aの広さがあり、本丸の北西側には、高さ一・六m長さ五・五mの石垣が現存している。南面は山の尾根続きで、本丸下約一〇mの所に東西約四〇m深さ三mの空堀りがある。

九鬼城(志摩利城)の支城と言われ、固屋城より移り有井城馬屋原を継いだ、有井九代宗正の子治盛が、尼子に属して中務小輔立花介に任ぜられて、ここに築城して移った。大矢城馬屋原の初代である。

二代は成高で、有井城一代元政の男であるが、初代治盛の跡を継いで中務大夫と稱した。成高は後に大

森へ所替えとなり、大矢城馬屋原はこの二代で終りである。

その後には龜石の大谷城から川上李之進が入ったが、これは馬屋原氏を嗣いだわけではない。

『神石郡誌』には、初代成高二代治盛となっており、治盛には三子があり、長子は大矢城で病死、二男は野田に下り、三男は油木に落ちた。そのあとに川上李之進が入ったとある。これは治盛と成高がいれかわっているようである。

「西備名区」や、高田文庫の「向長谷馬屋原家系譜」には初代治盛で成高はその嗣となつてゐる。また、郡誌には、治盛は但馬守の舎弟と記されているが弟ではなく但馬守の叔父である。三子があったというのも郡誌にのみの記述で他の資料には見えない。

川本李之進は大内義隆の旗下で龜石からこの城に移り、のちには五人の子息を大矢に残して甲奴郡龜谷に

移つたといわれる。五人の子息の名は伝わっていないが、嫡男某は防州に移り、次男は毛利侯に従い播州合戦に上月で討死、残る三子がここに残つて子孫がある。と「西備名区」に記されている。

山麓の相谷川に沿って伸びる町道の路傍に、「首切地蔵」と呼ばれる石仏がある。戦国争乱の時代の敵の捕虜斬首の跡に、後世の里人達がそれら薄命の士の供養のために建立したものではないかと思われる。

「九鬼城」(三和町小島久木)

この城は、小島集落の東南方に位置する大規模な山城で、町の史跡に指定されている。海拔高・比高ともに高く、また峻険で見通しのよい頂上を削平した長さ六〇mの広大な主郭と、その前側面の幅五〜一〇mの小郭とから成つてゐる。堅堀りが多用されているのはこの城の特色であり、また主郭背後の鞍部の五条の空

堀りは見事である。登山道に接した小郭もあり、全体的に言えば遺構がよく残つてゐると言えるだろう。

この城は一名志摩利城とも言われ、永正六年(一五〇九)馬屋原但馬守がここに築城して有井城から移つたと言われ、以後志摩利馬屋原氏の本拠の城として重要な役割を担っていたと思われる。

但馬守は永正年間(一五〇四〜二〇)有井城に居て尼子に従おうとし、大内に従おうとする弟元政と不和になり、備中平川の紫の城の平川氏に寄寓し、のち小畑に帰り九鬼に築城して移った。九鬼城馬屋原氏の初代である。但馬守は、織田信長の本願寺攻め、いわゆる石山合戦には、正光寺(現油木町近田)と協力して鉄砲百挺、金子貳百両、米貳百俵を本願寺へ送つてゐる。また小島八幡宮や岩屋寺、妙見宮を再建しており志摩利馬屋原党を代表する人物である。以下九鬼城

馬屋原は五代を数えるのであるが、これについては拙稿「中世における郷土の豪族馬屋原氏考」(広報さんわ掲載)で述べたので、この項では簡単に歴代城主名のみを掲げる

第二代宗治

第三代正成、のちに成廣と改稱

第四代元正、元正は固屋城一二代元範(相合元綱の嫡男)の嫡男である。正成に嗣なく固屋城から入つてその跡を継いだ。備中守を稱した。

第五代重春、備前守を稱した。天正年中(一五七三〜九一)父元正の時、秀吉の山城停止令が出され、重春は固屋城の麓に屋敷を構え済んだ。文禄の役には父と共に朝鮮に渡り、また大阪動乱にも出陣。

第六代重頼、父と共に大阪の陣に赴いたが帰国後府中・のち品治郡向永谷に住んだ。弟重俊は毛利に供奉して長州に移った。

(参考文献は次回にまとめて掲げる)

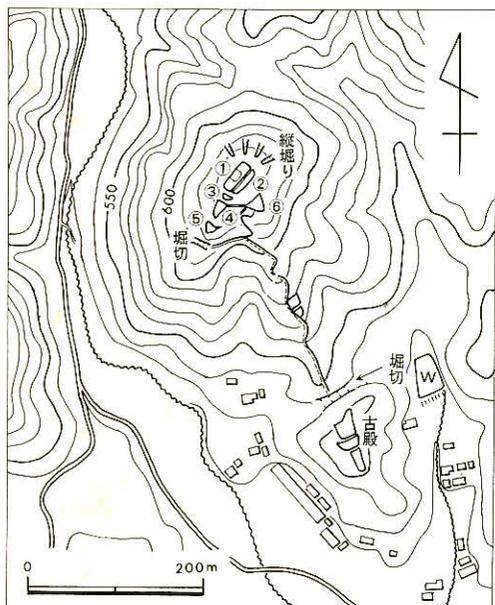
三和町山城誌

(四)

「固屋城」(古屋城)

三和町大字小畠

本城址は、志摩利馬屋原党三城址の一つで、構造的には最も整っており、町の史跡にも指定されている。城は、小畠盆地北方の独立丘陵状の山を利用したもので、頂上からは、眼下に小畠盆地を見下すことができる。西方は宮谷川によつ



▲三和町教育委員会・固屋城跡の発掘調査による

①～⑥は郭の番号

て開けた谷が深く、東方もまた北方に向かつて深く入った谷がある。北側は、背後の山と深い谷状の鞍部によって副されている。

郭群は、頂上の郭群と、登山道に沿った斜面の郭と、さらに南方に伸びる支尾根の北方を空堀りして区切り、(現在は町道) 独立丘陵状として頂上を削平した三段の郭がある。(古殿と呼ばれていたが現在はつじが丘公園)

頂上の第一郭は、幅一

二・五m長さ四〇mの長方形で、中央部がやや高くなっている。この郭の東側約二m下に幅五〜一〇m長さ三・八mの第二郭があり、

一郭の南斜面に五×一〇mの三角形の第三郭がある。その南下方に長さ三〇m幅

北側一五m南先端部五mの第四郭があり、一郭とは約六mの比高差がある。更に

その南方七m程下に一五m×一五mの三角形の第五郭

があり、また、第一郭の東側約一五m下方に長さ二五

m幅一三mの三角形の第六郭がある。(現在は金比羅

社の社殿がある)

堀切りは、五郭の南斜面と、支尾根の先端古殿との境いをなす部分にある。古

殿は三段の広大な郭があったが、今は公園となっており形状も少し変っている

が、居館的性格の強い遺構である。

第一郭の北側背後には、幅五m長さ一〇〜二〇mの

縦堀りが五〜一〇mの間隔

に四条ある。

この城跡は、昭和五十四年十二月に県教委に依頼して発掘調査が行われ、頂上の郭群から土器や陶器片、鉄製品・古銭などが出土している。

この城の城主は馬屋原氏であるが源氏の後裔と言われるもので、その始祖は、八幡太郎と言われた源義家の弟義綱といわれる。後三年の役の功によつて義綱は上総の馬屋庄を賜りこれに住し、のち嫡男義重が在地の名を取つて馬屋原氏を稱した。

この義重より十七代の後裔光忠が、ゆえあつて備後に謫せられ、志摩利有井城馬屋原氏に預けられた。有井馬屋原氏は固屋(小屋)を作り有井より扶持して住まわせた。のち許されて固屋を修理して城のようになったという。このことについては拙稿「馬屋原氏考」で紹介したから、以下

歴代城主の名を掲げる。初代馬屋原光忠、二代左

衛門太夫広季、三代備後守

綱村、四代越中守季広、五代左衛門尉弘光(治部大輔とも言われ従五位下であった)。六代光元、七代備前守義盛、八代左衛門太夫義綱、九代左衛門太夫義勝、一〇代備前守範政、一一代美濃守義政、一二代左衛門太夫元範、(毛利元就の庶弟相合元綱の八男) 嫡男としたものもある。一三代元詮、元詮は毛利氏の防長移封に従つて萩に移った。

(参考文献)
「神石郡誌」、「人物往来社刊・日本城郭大系広島・岡山」。「同、日本城郭全集12」。「田口義之・備後の山城」。「吉岡五郎男・正光寺と石山合戦」萩藩閩閩録「萩藩諸家系譜」。「立石定夫・杉原盛重」。「高田文庫・向永谷馬屋原家系図」。「三和町教育委員会・固屋城跡の発掘調査」。「備後古城記」。「西備名区」。「郡誌・続編」。「県教委・油木豊松民俗資料緊急調査報告書」。「川崎文市・大矢城(広報さんわ)」

初代馬屋原光忠、二代左

三和町山城誌 ⑤

文化財保護委員 松井正夫

「有井城」 三和町上
志摩利馬屋原氏の本城で、九紋所五本立扇子城ともいわれる。

大字上、字城江の低丘陵の先端部分を浅い空堀で区切り、上部を削平しており、比高も二〇m前後と低い。中心部の主郭は長さ四〇mと長大であるが、他の郭は狭く前方に階段状に並んでおり、居館的要素の強い城址である。

この城を築いた馬屋原は平家の末流といわれ、平忠正（清盛の叔父）の末子平五郎正友が、寿永の乱に源氏に味方し、その功によって文治元年（一一八五）備中に一荘を賜り水越馬屋原に住した。この在地馬屋原の地名をとって氏とした。

正友から五代の間は、鎌倉に仕え、宗尊親王の時本領の上に備後志摩利荘を賜り、馬屋原備前守貞宗が上村に移り住した。（貞宗は地頭であったと記したのもある）これに有井城馬屋原の初代である。この馬屋原については拙稿「馬屋原氏考」で述べたので、ここでは簡単に歴代城主

名を挙げて置く。

第二代 壹岐守重宗

第三代 但馬守重正

第四代 宗清（宗重）

第五代 成宗 この時元弘

の乱起こり、成宗は北条氏の要請によって京都にある時、留守の有井城は楠公に呼応して兵を挙げた桜山慈俊に属する軍団の攻撃を受けたが、成宗京都より馳せ帰って慈俊と和を結び、ともに天皇方として戦ったが、笠置落城、慈俊自決後は宮下野守とともに足利氏に属したという。

第六代 春宗 建武二年

（一一三五）足利尊氏上洛の

軍に従い本領を安堵した。

第七代 備前守忠宗、観応

の乱（一一五〇～五二）に宮

下野守（新市亀寿山城）ととも

に所々に出陣、京都にて討

死した。

第八代 備中守宗弘

第九代 宗正、固屋城主弘

光の次男

第一〇代 春宗 小早川美

濃守春平の男

第一一代 元政、兄に但馬

守正国が居たが兄弟不和とな

り、兄正国は備中平川紫ノ城

の平川久親を頼り寄寓、後

帰って九鬼城を築いてこれに移る。元政は後に石州大森に所替え。元政の男中務太夫成高は大矢城の治盛の養子となる。

第一二代 宗正 九鬼城に移った正国の次男で、大森に移った元政の跡を継ぎ、のち梨迫城に隠居したと思われる。

第一三代 信春 宗正の弟であるが、宗正隠居後の有井城を継いだと考えられる。

第一四代 元信 小輔五郎といひ壹岐守を称した。元信は毛利元就の庶弟（毛利弘元の六男）相合元綱の孫である。毛利家から志摩利庄式百五拾貫の地と豊松四カ村四百四拾貫の知行を安堵されている。（当時一貫の地は米高にして税高一石の地である。したがって出来高でいえば大略二石の地である）毛利氏の萩移住にしたがって萩に移ったらしい。

第一五代 某 彦右衛門ともいっただが、朝鮮の役で戦死。弟某萩に移る。

第一六代 某 毛利に供奉して萩に移る。

「梨迫城」 三和町上

大字上字城江の梨迫窪の奥詰に位置する。

志摩利党馬屋原氏の本拠有井城とは尾根続きである。頂上付近に数段の郭と空堀がある。

この城の城主については、『神石郡誌』梨迫城の条に「馬屋原藏人宗正の居」、「宗正は正国の次男なり」とある。宗正は有井城元政の後を継いだ人なので、次のように考えるべきだろうと思う。

有井城一代元政が石州大森に移った跡を、九鬼城主馬屋原但馬守正国の次男宗正が継いだ、これが何かわけあって梨迫城に隠居したと。宗正は備前守を称した。

第二代 宗忠

第三代 宗吉 毛利氏の防

長移封にしたがって萩に移

る。その子孫萩にあるとい

う。

（参考文献）

「神石郡誌」「西備名区」

「萩藩閩閩録」「向永谷馬屋

原家系譜」「日本城郭大系

広島・岡山」「日本城郭全

集12」「萩藩諸家系譜」「県

教委・油木豊松民俗資料緊

急調査報告書（河合正治）」



消費税の確定申告は

1月1日～3月31日

までです。

三和町山城誌 ⑥

文化財保護委員 松井正夫

「五殿山城」

三和町父木野

父木野の北部、海拔六六四mの五殿山の山頂を削平して築かれた山城である。

往古は、数段の郭や堀切り(空堀り)、防塁の跡など残っていたといわれるが、近年、手を加えられているので判断しない。山頂の主郭の数m下には、見張りの兵が立ったといわれる凹所が、一定の間隔を置いて何カ所がある。

山頂からの眺望は絶佳で、南に瀬戸内海と福山水島の重工業群、北に伯耆大山、東にネコ山、西に尾道高見山テレビ塔などを望むことができる。

城の歴史は詳かでない。「神石郡誌」に(扶桑略記に見えたり)として、元弘・建武の頃(一一三三―一三七)杉原筑前守元弘が、隠岐より御還幸の後醍醐天皇を迎えようとの城郭を築いたが、天皇山陰を御還幸になり、城構えしたのみであったと記されている。古くは御殿山と称している。

たが、幕府の力に押されて五殿山と改めたと語られている。また「神石郡誌続編」には(桜山朝臣詳伝による)とした元弘の乱の記述の中、楠正成と呼応して兵を挙げた桜山慈俊に従った武将の中に、地頭職五殿山城主相原筑前守高平の名が見える。

「石屋原城」

三和町父木野

三和町父木野の南端、神石郡と青品郡の境を劃する丘陵の先端部にある山城で、眼下に神谷川の流れとそれに沿って街道が走り、交通の要所を押さえる城と考えられる。

この城は南から北へ瘤状に突き出た丘陵の背後を空堀りで区切り、頂部に郭を配したもので、最高部に長さ約二〇mの本丸、背後に長さ約七mの二の丸、長さ約一〇mの三の丸を階段状に、しかも屈曲させて並べている。またこれらの郭群の比高約三〇m下に、約一〇m大の見張所と考

えられる出丸がある。

城の歴史は詳かでないが、天文・永祿の頃(一五三〇―一七〇)府中八尾城主杉原石見守元康の家老人江大蔵少輔正高が居城、正高は大力の士で、天正六年(一五七八)播州上月の合戦で、谷底へ落とされた大砲を弟と力を合わせ担ぎ上げた話が伝わっている。弟入江左衛門進、同平内も居住した。杉原盛重の没後はその子、元盛・景盛に従ったが、景盛が非道にも兄を討って吉川家から誅せられた時、浪人して備中高屋村に住み、のち深津郡菟路村に住した。

このことを「備後古城記」には次のように記している。
入江大蔵大輔正高
同 左衛門進 同弟
同 平内 同弟

入江氏兄弟杉原播磨守に随逐す。牢人之後備中高野村に住す、後深津郡菟路村に住。石塔菟路村に在。なお、村田隼人高英も正高に従ってこの城に住したという。村田氏がいかなる人物か

明らかでないが、中津藩備後領の代官村田氏の系譜に、同氏の先祖は武田氏に仕えて信州岩村田城に在る時、在地の名を取って村田を称し、武田氏亡びし時この地に來たり入江大蔵大輔に仕え、尼子亡び入江亡びし時父木野村に帰農したとあるが、この村田氏と関係があるのか、あるいは単なる同姓か、今後の研究に俟つほかない。

(参考文献)

- 「神石郡誌」「神石郡誌続編」「村田家系図」「西備名区」「備後古城記」「日本城郭全集12」「日本城郭大系広島・岡山」



3～5月は全国緑化キャンペーン

「緑の羽根募金」や「緑と水の森林基金」にご協力

みんなで緑を守り育てよう



三和町 山城誌

⑦

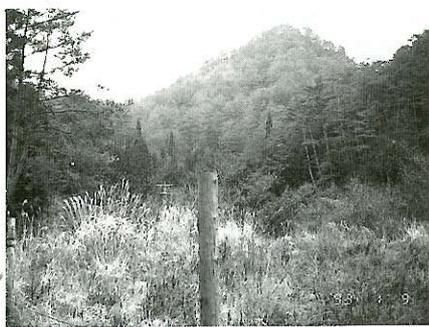
文化財保護委員 松井正夫

「清滝城」

三和町大字高蓋

大字高蓋下組と階見日南とに挟まれた山の南方に伸びる尾根の先端部分が、深い鞍部によって区切られ独立丘陵状となっており、その頂上を削平した主郭と、その南方斜面上に多くの郭を持つ山城跡である。

頂上の主郭は、ほぼ東西四〇m、幅一四mの半月形の郭で、その南方一m下に、長さ二〇m、幅九mの三日月形の第二郭、その約三m下方に長さ一三m、幅五mの第三郭、その西よりの下方に長さ一五



▲清滝城跡

m、幅六mの第四郭、第三郭の下方五mに長さ三五m、幅五mの、それぞれ三日月形の郭が階段状(棚田状)に構築されている。更に、主郭の東側北寄り一〇m下には、一〇mの半月形の郭と一二mに五mの半月形の郭が一mの北高差で並んでおり、北側西寄りにも五m下に一〇mに八mの三角形の郭があり、郭の配置が複雑である。

これら多くの郭はそれぞれの機能を持っており、いずれかは烽火台であったらしい、どれかは見張り用の出丸であったろうが、どの郭がどうか特定はむずかしい。

山麓を流れる川を隔てた向うの山並みの頂上近くの尾根に、昔は鐘楼があつて、この城の烽火の合図を見て鐘を打ちながら、急を城下に告げていたと伝えられ、鐘楼の跡は今も残っているということだ。

また、山の七合目あたりに馬路と呼ばれる道幅のしつかりした道があるが、これが古くからのものであれば、馬に

よる登山道か馬によって荷物を運び上げた道、あるいは馬場と考えられるし、また、近代のものであれば、伐採木を馬に曳かせたいわゆる馬道であろう。

さらに高蓋側の山麓にはかなり広い平地があり、居館跡か勢溜りかと考えられる。

城の由緒は詳かでないが、「神石郡誌」には「瀬尾甚右衛門、同甚四郎の居」とある。

町教委編集の「固屋城跡の発掘調査」には、この城を「大殿城」としているが、地域の人々は自力地区にある城を大殿城と呼んで、この城跡は清滝城と呼び大殿城とはいわない。

「滝飛山城」

三和町大字桑木

桑木と切田のほぼ中間地点にある、標高六八二mの高い山を利用して築かれた山城跡である。

頂部に二段の郭があるといわれる(筆者はまだ登っていないので他の記録による)



▲滝飛山城跡

城の由緒は明らかでないが、入江正高の居城といわれる。入江正高といえは、府中八尾城主杉原石見守元康の家老人江大蔵少輔正高のことであろうが、正高は父木野の石屋原城に居城しており、同時に二つの城を預かっていたのか、あるいは、時期を違えての居城か明らかでない。

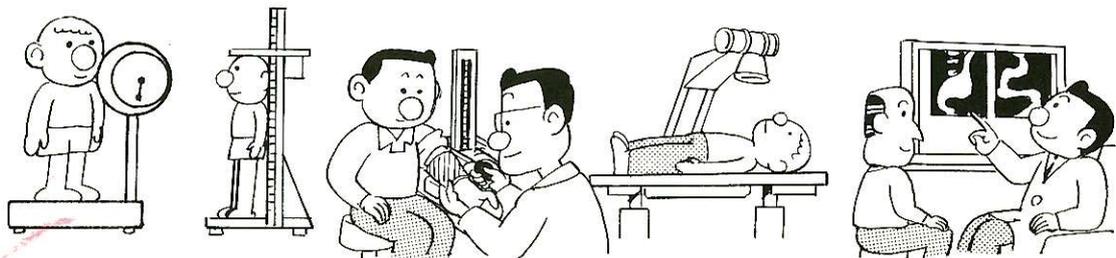
「参考文獻」

「神石郡誌」

「固屋城跡の発掘調査」

なお、清滝城の調査には、高蓋瀬尾斉氏、同梅岡寿啓氏、上下町階見小林富夫氏のご協力とご指導を頂いた。掲載の写真は瀬尾斉氏撮影のものである。ここに三氏に対し深くお礼を申し上げる。

"HANDLE LIFE WITH CARE — PREVENT VIOLENCE AND NEGLIGENCE"



いのち 生命を大切に——暴力や過失を防ごう

4月7日
世界保健デー

三和町山城誌 ⑧

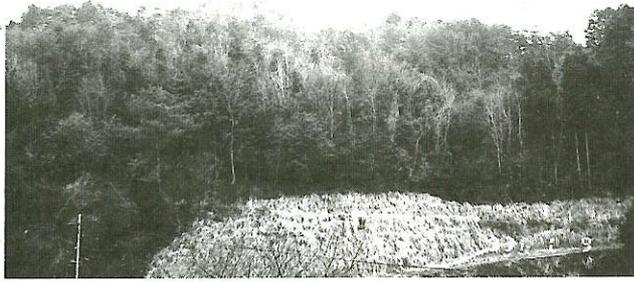
文化財保護委員 松井正夫

「門田城」

三和町大字高蓋棚ノ木

棚ノ木谷に向かって突き出た、山の尾根の先端部分が深い鞍部によって区切られ、独立丘陵状となっており、その頂上を削平して築かれた山城である。

頂上を削平した主郭は、径約二二mのほぼ円形で、その下方約五mに、主郭を取り巻



▲門田城跡

くように幅二〜三mの馬蹄形（円形に近い）の郭があり、さらにその下方約三mに幅四〜五mの空堀りが円形に主郭を取り巻いている。ある資料にはこれを郭としているが、空堀りの崩れ埋まったものと考えた方がよさそうだ。これが平らな郭の崩れたものであるれば、道状の端の部分が欠落して下がる筈だが、道状の中央部分が凹んでいる箇所が多い。幅二〜三mの空堀りを巡らしていたのではあるまいか。城郭の全周に空堀りを囲ませた山城というのは非常に珍しいと思う。

城の由緒は詳かでないが、門田弥右衛門の居城といわれる。同所長善寺の寺伝によれば「応永三年（一、三九五）二月十三日、門田城城主門田弥右衛門が菩提寺として棚ノ木門田池のそばに長善庵を創建、雲心和尚が開山であった」とある。これによってだいたいの築城年代は推測できる。

「大殿城」

三和町大字高蓋自力

小学校の両側、市街地に向かって北方の山から伸びる尾根の鞍部を空堀りで区切り、南端部分を独立丘陵状として、その頂上を削平した、径二五mのほぼ円形の主郭がある。その南側比高二〜三m下方に、長さ三〇m幅一四mの三日月状の第二郭があり、さらにその下方約五mに、長さ二〇m幅一〇mの半月状の第



▲大殿城跡

三郭があり、その下方斜面は共同墓地となっている。前回の清滝城の項でも述べたが、この城を高蓋城とし、清滝城を大殿城とする資料もあるが、地域の人々はこの城を大殿城と呼んでいる。

城の由緒は明らかでないが、「神石郡誌」大殿城の項には、「藤原上総大丞、同元彦、同播磨守の居、落城の後大壁平屋敷へ下り住す。」とある。

「倉掛城」

大字高蓋下組

高蓋から永谷へ通ずる道の右側にある山で、「神石郡誌」には、「城主知れず。」とある。左側の向うには清滝城があるが、これの出城だったのであるまいか。

（参考文献「神石郡誌」「固屋城跡の発掘調査」）なお、門田城と大殿城の調査には、高蓋瀬尾齊氏梅岡寿啓氏のご協力とご指導を頂いた。ここに附記してお礼申し上げます。

看護の日・5月12日

看護週間・5月9～15日

わたしたち一人一人が「看護の心」を



三和町 山城誌 ⑨

文化財保護委員 松井正夫

「木津和城」

三和町大字木津和

三和町大字木津和末宗木津和三矢子氏宅背後の山で、頂上に比高差約一mで二段の郭がある。また中腹や、下方の、山の両側から登って来る道の交差点に、やや広い平坦地があり、出丸の跡か勢溜りと思われる。



▲木津和城跡

城の由緒については「西備名区」に「木津和城は木津和太郎与助の居城で、与助は右

大将頼朝鎌倉入館の砌に、神石郡司に捕せられて当郷に住した。承久の乱には北条義時に従って出群の働きがあり、これより世世鎌倉に仕えたが、その間の世系名字はわからない。与助より十五世この処に住した。天文年中(一五三二〜五五)同太郎左衛門助宗の時毛利家に従い、同左衛門尉高助は毛利氏の長州移封に供奉して長州に移った。この邸に木津和氏の家があるが、これは本家の高助が長州に移った時、助宗の子孫がこの地に止まったものである」とある。

また、木津和家の系図には、「木津和左頭太郎左衛門助宗が、毛利氏より当郷及び、阿下、高蓋の三郷で①二百貫を与えられ、朝日山(川上昇氏宅背後の山)に築城した。しかし、この地は水の便が悪いので、間もなく小丸山(池の上の低丘陵)に移り、のちさらに、要害の地であり交通の要衝でもあるこの山に城を移した」と記されている。

享保八年の「備後御領内、古城跡書上帳」(中津市小幡記念図書館蔵)には、次の五つの古城跡が書き上げられている。

る。

「木津和地区の」

その他の古城跡」

享保八年の「備後御領内、古城跡書上帳」(中津市小幡記念図書館蔵)には、次の五つの古城跡が書き上げられている。

御高札場今古城跡迄九町 木津和村

国谷山

一、古城跡壱ヶ所

右城跡 石取形地無御座候

立木無御座草山ニ而御座候

御高札場今古城跡迄五町 同村

わさくり(?)

一、古城跡壱ヶ所

右城跡 石取形地無御座候

雑木立木御座候

御高札場今古城跡迄三町 三拾間

塚の山

同村

同村

御高札場今古城跡迄五町 同村

重行上山

一、古城跡壱ヶ所

右城跡 石取形地無御座候

立木無御座草山ニ而御座候

以上五カ所である。木津和三矢子氏所蔵の享保五年「木津和村神社仏閣名所旧蹟書上げ」にも、城山の名は違うものが多いが、前記と同数の五つが書き上げられている。

以上

註①二百貫は中世の知行貫高制による知行高で、だいた

い一貫は米一石である。これは物成高(税高)であるから出来高(表高)に直すと税率五ツ(五割)として二石である。近世の知行石高制に直すと二百貫は四百石となる。

(参考文献 神石郡誌、西備名区、木津和家系図、その他木津和家文書)

この城跡の調査にあたっては、木津和三矢子氏のご協力を得て、同家の諸種の古文書を披見させて頂き、種々ご指導を頂いた。ここに附記してお礼申し上げます。



三和町 山城誌

⑩

文化財保護委員 松井正夫

「峠城」

三和町大字高蓋

高蓋市街地中央部に向かつて、北方の山から伸びる尾根の先端部の、頂上を削平した長さ三五m、幅二〇mの主郭があり、その南側下方二mに長さ一〇m、幅三mの第二郭がある。

城の歴史は明らかでないが、酒井萬之助の居城といわれる。

「中城」

三和町大字常光

三和町大字常光、瀬尾忠義氏宅背後の山で、頂上にはほぼ東西に長い平坦地がある。また所々に土饅頭状の古墳と思われる小丘が数基ある。

城の由緒・城主等は明らかでないが、有井城か固屋城の枝城として、馬屋原氏の一族が住したものか、または有事の際の前線基地としての出城であったか、あるいはまたこの城跡が、志摩利馬屋原党三城と呼ばれた有井城・固屋



▲中城跡

城・九鬼城の、ほぼ中間点に位置することから、「伝えの城」「繋ぎの城」などと呼ばれる連絡用の城であったのではないか、などいろいろの場合が考えられる。

「高木城」

三和町大字常光

三和町大字常光、若林康登氏・若林善章氏宅の背後の低丘陵で、頂上に約三〇aのほぼ円形の主郭があり、その三



▲高木城跡

四m下に幅二〜三m(広い所は四m)の帯状の空堀りか郭と思われるものが、主郭を環状に取り巻いている。これが主郭と、東側と西北及び西南に伸びる支尾根とを劃する部分は空堀りであったことがはっきりわかる。古くはこの環状のものは全部空堀りであったとも考えられる。

城の由緒・城主等は明らかでないが、近くの「中城同様、有井城または固屋城の枝城として、いずれかの馬屋原

氏の一族の住したもの、または前線防衛の出城であったか、さらには志摩利馬屋原三城(有井城・固屋城・九鬼城)間の連絡用の「伝えの城」「繋ぎの城」などと呼ばれるものであったか、いろいろ考えられる。 終り

(参考文献「神石郡誌」)

「固屋城跡の発掘調査」

この城跡調査には、高蓋・梅岡寿啓氏、常光・瀬尾忠義氏のご協力を頂き現地案内をして頂いた。ここに附記してお礼申し上げる。

十回にわたって、町内の中山城跡について述べて来ましたが、その数二十九、旧記に見えるものは残らず書き上げたいつもりです。不十分の点が多々あることをはさかしく思います。

長い間おつきあい頂き有難くお礼申し上げます。

あわせて、調査にご協力頂いた方、資料を提供頂いた方にも、深くお礼申し上げます。この稿を終ります。

無料

交通事故
ご相談

●電話のご相談もお受けします

☎082-247-5380 (直通)

相談日：月曜から金曜午前9時半～12時
午後1時～4時40分(祝祭日を除く)

◎専門の相談員が親身になって

ご相談に応じます

◎弁護士相談日：毎週火曜日午後1時～4時

社団法人 日本損害保険協会

広島自動車保険

請求相談センター

広島市中区立町1-24

広島信用金庫有信ビル8階

広島調査事務所内 ☎082-247-4465